

オスマーン・ブン・アッファーンとオマル・ブン・アルハッターブの時代—II

(P.171/L.7) これらはオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉し給わんことを、彼のカリフ職に関する意見であった。そしてそれらは彼の民に関する彼の洞察力であった。そして彼は彼等を最も良く知っていた。そして正にこれらの状況にとって、オマル・ブン・アルハッターブからの(意見は)知的な人々にとって何物も抗し得ない価値を有していた。そしてもし私が解説するならば、人々の中の完全な者と以外には理解し得ない、そして英雄達の中の天才以外には辿り付けないオマルの章句の一つがある。そしてそれは、如何なる政策であれ、それに匹敵するもののない政策を含んでいるのである。

つまり(オマル・ブン・アルハッターブ)神が彼に慈悲を与え給わんことを、彼が姿を現し、そして神が彼を導いた様に、彼は表明したのであった。そして神はその善において、彼等の様な者達以外は理解し得ない秘密をその創造の中に(設けた)御方である。

それから(オマル・ブン・アルハッターブ)神が彼に慈悲を与え給わんことを、彼は次の様に言って、彼の言葉を締め括った。

「私は汝達の中(から選ばれる)カリフに、偉大なる神を畏怖する事を助言する。私は彼にこの私の寢床(当時オマルは死の淵にあった)の如き(カリフの座)を彼に警告する。そして(人々の)顔が白くなり、そして黒くなる(最後の審判の)日を彼に恐れさせる。汝達が神に晒され、汝達の中に隠し事が隠されない日なのである」。

そして彼は気を失っていた。そしてとうとう人々は彼が既に過ぎ去った(死んだ)、と思った。それから彼は気を失って目を覚ますことはない俛、人々は彼を呼び始めた。すると或る話者が言った。「もし彼に注意を喚起する物があるならば、それは礼拝でしょう」。すると彼等は言った「嗚呼、信者達の長よ、礼拝です」。すると彼は両目を開けてそして言った。「礼拝である」。嗚呼この時に彼はイスラームにおいて礼拝を放棄する者、と言う事で気が付いたのであった。

つまり彼の傷が血を流した状況で、彼は礼拝したのであった。それから彼は彼等を向いた。そして言った「私は既に汝達に対して道を正した。それを汝達は歪めてはならない」。それから(P.172)アリー・ブン・アビー・ターリブに向かって、そして言った。「恐らくこれらの人々は貴方に関して、神の使徒から(受け継いだ)貴方の権利や高貴さや親族関係を知っているであろう。そして宗教における知識や法学に関して神が貴方にもたらしたことも知っているであろう。と言う訳で彼等は彼(アリー)にカリフ職に就くように求めるであろう。つまりもし貴方がこの件(カリフ職)を担えば、嗚呼アリーよ、この事に関しては神を恐れよ。ハーシム一族の何人も、人々の首の上に(カリフとして)貴方は載せてはならない」。

それからオスマーンに向かって、そして言った。「嗚呼、オスマーンよ、恐らくこれらの人々は貴方に関して、神の使徒との姻戚関係や汝の優先権や年齢(による経験)や高貴さやを知っているであろう。つまり彼等は貴方を後継者に望むであろう。つまりもし貴方がこの件を担えば、ウマイヤー族の何人も人々の首の上に載せてはならない」。

それからスハイブを呼んで、そして言った。「3 日間、人々と連絡を取れ、そしてこれらの一団は集まり、そして彼等の間で相談し合うであろう。嗚呼神よ、私から彼等に対する親しみを取り除き給え。そして真理に対して彼等の意見を一致させ給え。そして彼等の踵を返させることのないように。そしてムハ

ンマドの共同体の諸事を、彼等の中で最も優れた者に任せ給わんことを」。

それから彼等は彼の元を出て行った。(オマル)彼に神の慈悲があらんことを、彼はその日に亡くなった。そしてスハイブは彼の為に祝福した。

(オマル)彼を神が嘉みされ給わんことを、彼の諸事における真理の人々の連帯を見てもよ。彼は自らのその状況において、共同体の諸事をその様な状況の下で執り行ったのである。そして彼がいた(状況が)彼を忙殺することもなかった。

そして彼の(周りに居た)人々に対する彼の洞察力と彼等があった諸状況に対する彼の叱責を見よ。即ち彼は、彼等の内の個々の者について、彼がいる(状況)にもかかわらず、好意も世辞も無く、言われなければならない事を言っているのである。

つまり彼はアンサール(メディーナでメッカから移住して来た人々を支援した者)に次の様に言う。「彼等には、貴方達の諸事に関することは何ら無い(何の係わりも無い)」。そしてイブン・アッパースとハサンと彼の息子のアブドッラーに対して言った。「彼等が則っている特性を彼が明確化したのもかかわらず、彼等には何事もない」。

それから彼は期限を3日間とし、その後彼等の首を刎ねることを命じた。正にそれ(カリフ職)はオマル・ブン・アルハッターブが、(病床にあった)彼の状況に関連して、イスラーム教徒達の重要な諸事の中で、備えて来た諸問題の中の一つであった。その折彼はベッドに臥していた。それから前述の6名の間でイスラームにおけるイマーム(カリフ)職を担う為に、彼等に資格を与える事になる諸状況を明らかにされた。それ(カリフ職)に関しての彼等の中の欠点と、その後の事を彼が解き明かし、それから彼は、共同体の諸事に関連した者達が、理解する幾多の裁定の仕方、その問題について裁定した。

(P.173)そして彼等が彼に、彼等の内の一人について何も残らないようにしなければならないことを(洗いざらい喋る事を)、彼等に語る様に求めた時に、彼は言った。「サアドには苛烈さと粗雑さがある」そしてこの2点は多くの状況の下ではアミール(の性質に)相応しくない。何故ならアミールは医者(の如き者)であり、病気の人々から逃げはしないし、痛みはそれを治療事が彼等の元にやって来るものである」。

そして彼はアブドルラハマーン・ブン・アウフに言った。「汝はこの共同体のファラオ(王)である。そしてこれは突き刺すような一撃であり、大なる爆弾でもある」。何故ならイブン・アウフは教友達の中で、金銭的に一番裕福であったからである。

そしてアズベイルに言った。「彼は満足の信仰者であり、激怒の不信心者である」。この事の意味は、もし汝が満足したならば、汝は信仰者の行動を為し、そしてもし怒ったならば、不信心者の行動を為す、と言う事である。即ち激怒は不意に汝を伴い諸事を攻撃する。言わんとする事は、彼への脅迫であり、激怒を彼に避けさせることであった。(その激怒は)彼をその結末が称賛されない様な事へと彼をもたらすのである。つまりこのような者は人々の諸事を担う者にはなれないのである。

そして言った。「タルハに関しては、尊大さと高慢がある」。そしてこれらの2つはまた宗教においては、非難される特性なのである。そして信仰はそれに満足していない。望まれている事は、それを放棄する事である。特に彼の諸事が彼の妻の手中にある時には、その意味は、彼が彼女に反対しないことである。そしてこの状況は、男性において最も醜い状況なのである。そして人々が栄える時、たとえ女性が

彼等のアミールになっていたとしても、女性は理性が弱く、意志が脆いのである。

オスマーンに関しては彼の一族への連帯意識と彼等への愛情について語った。そして愛情は盲目であり、耳が聞こえなくなり、社会の政策に不相应しくないのである。

そしてアリー・ブン・アビー・ターリブについては、彼がアミール職を熱望している事に関して言った。つまり彼は、彼がそれを引き受ける事を恐れていたのである。

つまり神の使徒は言われた。「我々は我々の諸事、それを我々に求めて来る者に委ねない」。そして彼は教友達の或る者達、神が彼等を嘉し給わんことを、彼等に言った。「汝が救済する心は、汝にとって、汝が数えきれないほど大きなものにする首長国よりも良い」。そしてこの事から拡張した数多くのおハディースにおいて、ムスリムの学者がそれを伝播した。そして妥当なもの、それがこれなのである。つまり理性有る者は全くその事(首長の座)を求めないのである。そして「それ(カリフの座)に就く様に求められ」苦悩する者は誰でも、それに関して(神に)助けられるのである」

そして既にアルファールーク(オマル・ブン・アルハッターブ)彼に神の慈悲があらんことを、彼はこれらの人々の諸状況の中に有る個々の隠された物を説明した。(それは)それによって、当時における共同体の純粋なる者達であったこれらの人々の胸の内に巢食っているそれらの病原菌を取り除くためであった。

イスラームについては、そのアルファールーク(オマル)彼に神が慈悲を与え給わんことを、(P.174)彼の共同体の諸事を取り仕切り、議論する事に関して彼を楽しませることはなかった。それは彼がこの様な状況において、ひとかどの者であったからである。つまり彼等が「神の証拠」であると言われたその男達は何と素晴らしい者達であろうか。そしてオマル・ブン・アルハッターブは、ムスリム達が彼等の意見の一致に頼る真理の人々の意見の一致を持って、正に彼等の先頭に居る者である。

(オマル)彼に神が慈悲を与え給わんことを、彼の死後、ムスリム達は一人の家に集合した。そして評議会の件に関して、評議会の人々の見解は一致した。そして彼等はアブドッラー・ブン・アッバースとアルハサン・イブン・アリーとアブドッラー・ブン・オマルを連れて来た。それから彼等は 3 日間協議したが、導火線を燃やすことは出来なかった。

そして 3 日目になり、アブドッラフマーン・ブン・アウフ、神が彼を嘉し給わんことを、彼が彼等に言った。「貴方達は(今日が)如何なる日か知っているか?この日は貴方達の教友が、貴方達が貴方達の一人を後継者として指名するまで、貴方達にバラバラになってはならない、ときつく言った日である」。彼等は言った。「その通りである」彼は言った。「私は貴方達にある事柄を提示する」。彼等は言った。「汝は何を提示するか?」彼は言った。「私に貴方達の諸事を任せて貰いたい。そしてその(カリフ職に就くと言う)中の私に対する割り当てを貴方達に与えよう。即ち私にはそれに関して割り当てが無いと言う事になる。それどころか残りの 5 名のグループにそれが渡るということになる」。

そして彼(アブドッラフマーン・ブン・アウフ)神が彼を嘉し給わんことを、彼は人々のそれ(カリフ職)への欲望の強さとそれを獲得するために首を伸ばしている様を見てとっていた。そしてオマルは彼に既に次の様に言っていたのであった。「汝はこの共同体のファラオである」。

アブドッラフマーンは言った「貴方達自身の中から貴方達の為に私が選ぶであろう」。即ち選択において私に判断させて、そしてそれに対して私に(使命を)課して欲しい、と言う事である。すると彼等は言

った。「貴方が要求したものを、我々は既に貴方に与えている」。彼は言った。「人々がアブドゥラフマーンに委ねた、つまり諸事を(任せ)そして彼にその問題における判断を委ね、そして彼がそれから身を引いた時に、彼は彼等に言った。「貴方達の諸事を貴方達の中の3人へ任せよ」とアズベイルは彼の事柄をアリー・ブン・アビー・ターリブに委ね、タルハは彼の事柄をオスマーンに委ね、サアドは彼の事柄をアブドゥラフマーン・ブン・アウフに委ねた。

アルムサウワル・ブン・ムハッラマが言った。「それからアブドルラハマーンが彼等に言った。「私が行くまで汝達の場所に居よ」。そして誰一人として彼だと分からない様に覆面をして、マディーナの諸地域で人々に会いに出掛けた。つまり(メッカから移住して来た)ムハージル達や(マディーナで彼等を支援した)アンサール達や彼等以外の弱き人々や烏合の衆の中の誰一人として、彼等に質問し、相談しなかった者はいなかった。

彼は言った。「一方、意見の持ち主達はと言えば、彼は彼等の元に相談にやって来た。(P.174)そして彼等以外の者達にも質問を投げ掛けた。そしてオマルの後、人々の口からそれを受け取る為に、情報を熟知する者としてカリフをどの様に見ているか、と述べた。

つまり神は、彼から出て来る好みにもかかわらず、彼の下僕達の口上にそれを投げ掛けたのである。つまり彼と相談し、そして彼に尋ねてくる者に誰一人として出会わなかったのである。彼等は皆「オスマーン」ということ以外に言わなかったのである。

つまり彼が、オスマーンでの人々の一致と彼等の合意を見た時に、アルムサウイル、神が彼を嘉し給わんことを、彼は言った。「イシャーが私の処に来て、私が眠っていることが分かった。とう訳で私が彼の元へと出掛けて行った。すると彼は言った。「正に私は貴方が寝ているのを見た。神かけて、この3日以来、私の目が眠りを堪能することはなかった。即ちその日々においては、貴方は私にムハージルの一団の誰それを呼べ、と言っていた。と言う訳で私は彼の為に彼等呼んだ。そして長い間、彼は彼等とモスクで密談した。それから彼等は彼の元から立ち上がり、そして出て行った。

そして彼はアリーを呼んで、彼と長い間密談した。それから彼(アリー)が、彼の元から、野望、即ちこの件に対しての(野望を抱いて)立ち上がった。即ち彼はあたかもそれ(カリフの職)が彼の為にあるものとみていたかの様であった。

それから彼は言った。「私の元にオスマーンを呼べ」と言う訳で私は彼を呼んだ。そして彼は彼と長い間、密談した。それは夜明け前の礼拝の時刻の到来が彼等2人を分かつまでであった。それから彼等全員での礼拝をした。

それから彼等一人一人に対して誓約と契約を行った。もし我が汝に誓いを立てたならば、汝は我々の為に、神の書と汝の預言者のスンナ(奨励行為)と汝以前の汝の2人の教友達のスンナを執り行う。つまり彼等一人一人は、その事に関して、彼に対して契約と誓約を与えたのであった。

そしてまた、もし汝以外の者に私が誓いを立てるのであれば、汝が満足し、無事を図り、汝の剣は、私と共に拒否する者に対するものになろう。つまり彼等は彼に対して、彼等の約束や誓約からその事(カリフへの誓い)を与えたのである。

そしてその事は、彼等の内の一人がそれ(誓約や契約)で誓いを立てることを避けられなかったからである。そして残った者達は、(命令を)聞き、服従し、そして全員に刃向う者に対抗する援助をしなけ

ればならなかった。何故ならばそれ(誓約や契約)は決して全員の為のものではなかったからである。

つまり我々は、彼等が彼と意を異にしない様に、彼を契約と誓約によって彼等を結び付けている者だと見ているからである。そして彼は人々、特別な者達であろうが一般の人々であろうが、彼等に耳を傾けていた。そして彼等からオスマーンにその事(カリフへの就任)に対しての期待がある事を知った。

何故なら彼等は表面上に現れた彼の資格性、そして有名な彼の能力に注目していたからである。そして威力を持ち偉大なる神に不可視は帰属する。

(P.175、2016/4/6)